おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和元(2019)年
10月号
通巻590号
毎月23日発行
(題字　矢追日聖)

★発行日　令和元年10月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷　大倭印刷株式会社
★定価　1部　250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

原尻の滝（大分県豊後大野市）　福井市　齋藤正宏さん撮影（文・８頁）

昭和40(1965)年10月23日　月次祭法話より

既成宗教を立て直す柱としてのお役目

法主　矢追日聖（満53歳）

日本の風土と民族性

ここしばらく良いお天気が続いております。秋になってくれば空が美しく、すがすがしい気分になります。これは日本人が、昔から常に自然と人生というものを一つとして生きてきた名残りだと思うんです。歌や俳句にでも秋の良さを取り入れて、精神的な喜びを持つ。これは習慣と言えば習慣ですが、日本人が気持の中に持ってきた民族性だろうと思います。

そして、だんだん木の葉の色が変わって散ってしまうと無常を感じて涙を流したりする人もある。日本の風土に住んできた民族として、春も楽しければ秋も楽しいし、そうした自然の変化の中に、何かしら人間生活の潤いというものを持っていたんですね。

宗教はどこにあるのか?

今日まで、私は皆様方の前で色々話をしてまいりましたが、別段今から新しく言うことはないんです。『大倭新聞』も復刊して九月で十四回になりましたし、私個人の気持なり、また大倭教として発足してからの二十年間にやらされてきたことなりを、大体の骨組みだけは殆ど書いたと思っています。

これからは、広く社会全体を見る段階になってきたと思っておるんです。

それで、最近よく在家仏教とか在家宗

教とかいう言葉を聞くことがあります。僧侶とかお寺にいる人は出家と言うのに対して、一般の信者とか檀家の側を、区別して言うために在家という言葉を使います。

在家仏教という言葉が、最近出てきているということは、僧侶とか教会の牧師とか神社の神主とか、そういうような特殊な立場にある人にとっての宗教を言う場合と、信仰している一般の人、つまり信者側にある宗教とでは、何か別々のものがあるという言い方なんですね。

事実、現代の社会を見ますと、寺や教会や神社の中に宗教があり、そういうものを中心として信仰する。これが一般的な感じ方だと思うんです。

宗教という言葉は、私も口ではよく言いますし、新聞や雑誌、テレビでも使っておりますが、改めて考えてみれば、宗教というものの本当の意味はどんなところにあるのか。

言い換えれば、世界の宗教の一つの定義として、どういうものをもって宗教と言うのか。厳格に考えてみますと、分かったようで分からんというのが宗教だと思うんです。

私自身にも宗教とはこうこうであるという定義ははっきりしないんです。

学者とか宗教専門の人に、宗教の定義は何ですかとよく聞くんですが、今日まではっきりした返事をしてくれる人はいないんです。ということは、皆が漠然としたものをとらえて、これが宗教だと言っているような程度だと思うんです。

仮に学者一人がこれこれが宗教であると言ったとしても、また字引をひけば宗教の説明が書いてあるとしても、殆どその言っている人の、書いている人の主観ですわね。それが文明国から始まって未開の地まで、世界の全人類に通じる宗教の定義であるかどうかということになってくると、ちょっと難しいと思うんです。

大倭教の名称にとらわれない

だから私はこの宗教という言葉に、あまりとらわれたくないんです、事実は私自身にも分からないんですから。

文字は中国でつくったものですが、日本では「宗教」という漢字を使ってます。それを通した感じ方では、「宗」はものの根本であり本質であり一番根源であるということで、「教」は教えのことですから、ある程度は理解できるかもしれません。ところが、全て一切のものの根源とか中心とかいう意味がね、これはまた実に広いですから分かりにくい。

だから私は、強いて宗教というような言葉はなくてもいいと思うんです。

ここも大倭教の名のもとに終戦と同時に出発したのですが、世間の範疇（はんちゅう）では天理教とか金光教、あるいは大本教とかと同列に、新興宗教の中に入っております。大倭教は神道だと、文部省では決めつけています。しかし私の気持としては、宗教であるとか神道であるとか決めつけられるというのが、あまり芳しくないんです。

大倭教という名称も、私はあまり好かないんですが、現在の日本に宗教法人法という法律ができておりますし、何か一つの名称がなければ、仕事をするのに不便ですから使っているのです。霊界からの指示でもありましたから大倭教と言ってはいるんです。

けれども名称とか宗教とか、そんなものにこだわるのではなくて、我々が生きていく上において人間的修養をするというような場合に、私は宗教とかそんな言葉を使っております。

我々は生かされている

私達が人間に生まれてくるのにも、親の腹に宿って生まれてきたのですが、その当時はどこの腹に宿って生まれたいとか、現在持っているような自分の気持とか、そんな記憶は皆おそらくないと思うんです。

自分以外の何かの働き、何かの力によって受胎して生まれてきた。だから自分が生まれてきたのではなく、いわゆる天地自然の力によって生まれさせられたんですね。

生きておるのでも、自分の力で生きているという考え方は誤っていると私は思うんです。これは生かされているんですね。生きていると思っているのは別にいいんですが、本当を言えば生かされているんです。

我々が生まれてくる以前に空気というものがあり呼吸してるんです。空気は人間が作ったものではないし、水があり土があり太陽があり、昼があり夜がある。そうした自然の道具立て、全ての条件がそろった中で育つように、人間も仕組まれています。もし、そういうような自然の色々な条件がないとするならば、人類というものはこの世に生まれもしなければ発展もしないんです。

自然は我々を生かしていくようにできているんです。自分ではえらそうに生きていると思ってても、それはただ、もともと自然の中に用意されているものを、自分の労力を使って加工するとか形を変えるとかするだけで、米やとか麦やとか野菜物やとか、口から放り込んでいるだけの仕事なんですね。それによって肉体を維持しているわけです。

幸せな人生とは

生まれてきて生きておって、個人一人一人が、できるだけ悩み苦しみのない生活の仕方を修養して、自分の一生を全うできたなら、人生それほど幸せなことはないと思うのです。

簡単な言い方をしますが、それにはどういう心境で、どういう世渡りをして、どういうような社会になって、どうしていけばよいのかとなってくれば、難しすぎて簡単にいかないのですね。

欲をなくすとか、あるいは愛情がなけりゃいけないとか、人類愛とか相互扶助の精神とか、今日まで過去に、いわゆる聖者や教育者、道徳家、色んな人が言葉としては言い尽くしてます。今さら改めて私が説明する必要ないんです。

けど世の中を見渡せば、「ああ今日は一日結構であった、また明日も一日結構だ」と、喜びを持って暮らしている人が、小さく見てこの日本の国だけでも、一体何人あるだろうかと思います。昔からこの世は苦の世、苦の世界とはよく言ったもので、私でもこういうような仕事をしてきておりますと、色々な家庭の人との交渉がありますけど、大体どこの家でも苦痛の二つや三つ持ってるんですね。

太陽が照ってくれないとか、雨が降らないとか、そういうことで天地自然に向かって闘争する人はおそらくいないと思うんです。天地自然が守ってくれ育ててくれて、生かされているから我々は生きているんであって、どうにもしょうがないということになります。天地自然を加美さんと言うわけですね。加美には大きな慈悲もあります。

ところが、さっき言うたように、口から入れるものだけの問題で、多くの人間がものすごく悩んだり苦労したり、争うたりしているのが現実です。例えば近頃だったら、値上げ反対、ストライキというようにね。しかしまあ、これは人間対人間の問題だから、それで解決もするでしょう。

けれども、空気であろうが、太陽であろうが、水であろうが、そういうものが一つ欠けても我々は生きるのにものすごい苦痛を感じるんですけど、喧嘩する相手がないんですよ。そういう大きな自然の恵みに対しては、当たり前のように考えていたりしてね。そして、ただ人間が加工して作って口から放り込む食べ物だけの問題で、もうガチャガチャと喧嘩ばかりしているんです。

そこで、できるだけ苦痛のない悩みの少ない生き方をするには、どうすればよいかというようなことのために、宗教やとか、あるいは人間的修養やとか、色んなことが起こってくるんです。

宗教は我々の心の中にある

先ほど歌いました聖歌「黎明大倭」の最後は、〝昭和維新の人柱〟というような、現代人が聞いたら悲壮な感じに受け取れる言葉なんですけどね。あれは、そうじゃないんです。

昭和は、今の時代を表す日本の年号です。

維新というのは「これ新たなり」ということですから、改まっていくという意味です。

例えば今までランプだったのが電気を使うようになった、これも維新です。ランプと電気の場合なら、ランプが古くて電気が新しいと誰でも言えるんですけど、本質的に言えばどっちが古いとか新しいとか分からない時もありますから、結局、その時その時で形が変わっていくということなんです。

いわゆる宗教について考えていけば、お寺とか教会とかそういう所に宗教があって、そこへ行って説教でも聞くとか宗教を味わうとか、そんなのが今までの既成宗教です。坊さんや神主さんや神父・牧師さん等、特殊な人だけが悟って持っているものが宗教であると思っているわけです。

お寺に参って修養しようとか、神さん仏さんに頼んで人間的に向上していこうとか、何かしら一般の我々の家庭とか大衆と、切り離された高い所に宗教というものがある。だから、その宗教を求めて取りに行くんだ、自分のものにするんだと、こういうような考え方なんですね。

しかし絶対そうじゃないんです。それは根本から誤っているんです。自覚しないとしても、宗教というべきものは、我々の心にあるはずなんです。誰でも皆、赤ん坊でも持っている。それを、現代ではお互いに自分で出さなければいけないんです。

本当の宗教というのは、今言うような特殊な人のいる、我々から見れば高いような所にあるのではなくて、我々の心の中にある。漠然とした話ですがね、これが宗教なんです。

そこで大倭というのが昭和という現代に、維新の人柱になっていかなきゃならないんです。

この人柱はね、昔の時代に橋を架ける場合に犠牲として生きた人を埋めたとか、戦争中に兵隊を橋げたにしたとか、血を流す暴力革命とか、そんな悲惨なものじゃないんです。

家を建てる時、柱はなくてはならんものです。柱が家屋一切を支えているんですね。

今は宗教というものが、どこが柱やら頭やら尻やら、ごちゃごちゃになって潰れているんですね。それを今これから、大倭が、立て直しの柱の存在として、社会へ出て行かなければならない。本当の宗教を作っていく役目を一人一人が担っていか

なければならない。

血を流して犠牲になるような、そんな悲壮なものじゃない。ちょうど日蓮さんでも、「我、日本の柱とならん」とおっしゃった、ああいう意味の柱なんです。

これが霊界から、〝昭和維新の人柱〟と聞こえてきた言葉の意味なんです。今日、宗教と名のつくものがたくさんありますけれど、その中で大倭は、潰れたそういうものを、もう一度立て直していくというような大きな役目があるんです。

大倭教の信者にならなくていい

しかし、信者を獲得するんじゃないんです。大倭教団としての信者が、現在あるような大教団みたいにたくさんできたならば、これはもう既成宗教と同じ道を踏んでいるのであって、一つもそこに維新というものはないんです。既成宗教の化け物ですね、同じものが再現するんですから。これでは、改まっていない。

我々は大倭教であるというような信者がたくさんできて、一つの団体になれば、大倭教の信者だけの持っている独占物のようになってしまいます。そういうものではないんです。

だから、大倭教を信ずる人が、信者として何百万人という大勢で結束する、そういうようなものを私は望んでおりません。

私が言う「神ながらの法」というものは、仏教が日本へ来る以前から、我々日本民族が持ってきた宗教なんですね。その頃には宗教団体というようなものはなかったはずなんです。

仏教が来てからね、仏教の信者ですと言ってお寺を建てる、木仏金仏を並べるという形になってきたんです。仏教の来る以前の、日本の神ながらの宗教には、固定した一つのご本尊もないし、また自分は神ながらの信者であるという、そんなものもなかったんです。

その代わり、その当時のどこの家庭においても、日本人一人一人の心の中に皆、神ながらの宗教というものを持っておったのです。それはもちろん、今の日本のような文化社会じゃありません、もっと原始的であったかもしれませんよ。しかし、その持っておった宗教が、自分の日常の中に、あるいは社会の人々の中において生きていたと思うんです。これが、今、在家宗教とか在家仏教とかいう、正にそれなんですね。

そこへ仏教が来たために、お寺という中心ができる。金ぴかの仏さんのところへ行って拝まなければ、仏の恵みにはあえない、功徳がないと、それこそお寺へお寺へと皆集まって行く。

お寺の中には僧侶という教える人がいる。その教える人がだんだんと生き神さんのようになっていく。そうすると、一つの宗教的権威というものが生じてきてね。奈良朝頃には弓削道鏡というような、天皇の高御座をねらう僧侶も出てくる。仏教なんかの堕落した一面です。

これはもう、宗教ではなくて宗教的権力なんですね。それが政治的権力と結びついていくんです。

自然の法則に順応していく

これは一番危険なことなんです。大倭教であれば、何百万人かの信者の団体ができて矢追日聖というものを御輿の上にかつぎあげてね、そういう固まりが宗教的権力を持った場合には、社会に対してものすごい圧力となります。私が望まなくても、そこに一つの政治的な権力というものが自然についてくるんです。

矢追日聖が右向け言うたら、何百万という人が右向く。あれは恐ろしい存在やなと、社会の人に対して宗教であるのに恐怖感を与える。これは宗教の本質に逆らうことになるんです。

ですから、私がいつも言うように、大倭教の信者にならなくていいんです。皆さん一人一人の心の中にさえ、神ながらの法というもの、つまり自然と共にいくというものがあれば、別に大倭教の信者でなくても、例えばキリスト教、あるいは仏教とか天理教に所属しておってもいいんです。

誰であっても心の中にさえ、自然の法則に従ったような家庭をつくり、あるいは自然の法則に従った社会になるように努めていく、そういうものがあればいいのです。

これが、大倭で言っている奈母太加天腹ということ。奈母というのは、順応するということなんです。自然の法則どおりに我々が順応していく、これがね、一番いいと私は思うんです。

秋になってくれば秋らしい服装をする、冬には冬らしい服装をする、また夏になれば薄着になる。ということは、一つの自然の動きに対して我々が無条件に、理屈なしで順応していく姿なんです。自然と人間のふれあいのようなものなんです。それは人間対人間でも、裸と裸で抱きつくような一つのふれあいですね。

そういうようにお互い一人一人さえ努めていけば、世の中の色々なことも、ある程度緩和していくんじゃないかと思うんです。

複雑な社会ですから、まあ、今日は漠然とした話なんですけど、神ながらの法則を一人一人が細かく研究し、また自己修養していく、それが一番いいことだと思います。

大倭の宗教の、大きな動きというものは、そういうような中にあるんです。

大倭教はありがたいんだ、だから自分は大倭教の信者なんだとか、あるいはまた大倭教は自分のものだとか、神ながらの道は自分一人のものではないし大倭教を独占するような考え方を持たないでほしいんです。

神ながらの大法は、我々人類が発生する前からあるんです。その神ながらの法というものを、我々人間の社会において実際に行っていく、実現していく、あるいはそのとおり踏んでいくのが、最も自然な生き方だと思うんです。それが神ながらの道です。神ながらの法というのは、もともとあるものです。神ながらの法に従って我々が世渡りをしていく、それが神ながらの道なんです。

だから、法と道というものをよくかぎ分けて、我々は道というものについて、これからお互いに自己修養し練磨していく。そこに人間的な向上もあると思うんです。そういうような方法について皆さんも精通してほしいと思います。

（文責・編集部）

最初は昭和40年10月23日発行『大倭新聞』第15号に掲載されたものを、『おおやまと』紙で平成17年1～2月号で再録しています。

今回は、直接法話CDを聞いて、全体的に書き改めています。

こもれる魂魄の地を訪ねて（第49回）

時の河をこえて

神奈川県大和市
永仮　まゆり

平成19年6月号『おおやまと』に掲載された文化行事の報告は、同年5月20日に御所の神武天皇社を訪れたものであった（写真は、神武天皇社境内で撮られたその折のもの）。4月の石切剱箭神社とあわせて「長曽根日子を訪ねて」シリーズとしての記事になっていた。数ある『おおやまと』のバックナンバーの中でも、この記事から放たれる何かしんとした空気が私の印象に残り、時折引っ張り出して眺めることがあった。

野 保夫さん写

ある時、吾平津媛と思われる方から「なぜ（挨拶に）こないの」というような想念を感じ、意外に思ったことがあったが、曖昧なことは揺蕩わせておくのが私の癖である。気がつけば記事の掲載から12年の歳月が流れていた。

昨年から令和にかけて、言うに言われぬ変化とスピードを感じるような日々の中で、なぜか昨年の日聖祭に参加する前に神武天皇社に足を運ぶことを決めていた。最終的にはやはり法主様の声に背中を押されたのだろうと思っている。

◇

冬至の前日、早朝の御所は濃霧で行く先があまり見えなかった。玉手駅から方位磁針を頼りに歩いていくうちに視界が少しずつ晴れ、民家が立ち並ぶ小道の先に霧の中から浮かび上がるようにして神武天皇社があった。想像以上に小さく簡素で、橿原神宮とは対極だった。しばらく境内で過ごしながら、本社の南に嗔間神社という神社がそう遠くない場所にあるとわかり、歩いてみることにした。吾平津媛が祀られているという。

嗔間神社は民家の敷地の中にあるようだった。「家の中なのかな?」と妹のあづみとスマートフォンの地図を見ていると、丁度お宅からご夫人が生協の宅配のために外に出てこられた。我々の姿を見て「ポケモンですか?」と言われる。観光地でもない民家の門前で、リュックを背負った女二人がスマートフォン片手に突っ立っていたのだからそう思われても仕方なかった。このあたりも、ポケモンGO（GPS機能を使い地図上でゲームをする）のスポットとなっているらしい。

「嗔間神社はどこですか?」と私が尋ね、神奈川から神武天皇社を目的に訪ねて来たことなどをお話しすると、「それはうちです。ちょっと待っていてくださいね」とおっしゃる。意外な展開から中を案内していただけることになった。

お宅の敷地にある小さな扉から、嗔間神社のお社に入れていただく。入った途端、長い時間をかけて途切れない思いが息づいている気配を感じる。本当のところに案内されたと思った。

その後も藤井さんのご厚意で、お宅で数時間お話を伺うことが出来た。お人柄の良さと落ち着く空間に、初訪問であることも忘れてすっかり安心してしまった。数千年かけてこの土地と一つになり、思いを継いでこられた重厚な信頼感からくるものだろう。さりげなく飾ってあった百合の花の絵に心が惹かれた。藤井さんが趣味で描かれたものだ。吾平津媛のお心を思った。

この地域で婚礼があった時には、お社の前には白い幕が張られ、嫁入り行列もその前は通らず「嫁入り道」という別の道を通る風習が続いたという。ここは神武天皇が国見をされた嗔間丘の地であり、狭野命が初代天皇になる和議の条件として、媛蹈鞴五十鈴媛命を正妃としたため、九州からおいでになった前后の吾平津媛はその座を外さ

れ、侘び住まいされた場所でもあったのだ。そのような意味深い場所で、代々お社をお祀りされてきた藤井さんとお出逢いすることが出来た。

◇

そういった経緯を教務本庁でお話ししたところ、杉本順一さんが一度直接伺いたいとおっしゃった。そんな話の帰り道に林修三さんとお会いし、今年7月19日に4人（杉本、林、永仮姉妹）で訪問する運びとなった。

今回の訪問の前に、私自身は3月に御所市制施行60周年記念事業の行事に参加し、早春の葛城を地元の方々の案内で歩く機会をいただいた。掖上の道を、掖上鑵子塚古墳、国見神社、水平社、吉祥草寺と巡り歩き、今地元に生きる方々の気配と葛城地域の奥行きを垣間見ることが出来た。その時も藤井さんとご主人に大変お世話になった。

又、6月にはなぜか私達は父に呼ばれ実家の鹿児島に帰省する機会があり、従弟達とも再会した。その際に弟が運転をしてくれ、特に話をしたわけでもないが、吾平山陵や吾平津媛に縁りのある場所の一部に訪れることが出来た。南九州の温暖な気候は、どこか人の意識を茫洋とさせるところがあるように思う。神武一行は果たしてどのような使命感を持続し、長い月日をかけ大倭を目指したのだろう。地縁の妙を改めて思うこととなった。

7月19日の訪問当日は雨の降りしきる日となった。お宅に向かうタクシーの中、山裾から湧き上がる水蒸気に、ああいうのを出雲というのだと話が出た。お宅に案内され、まず杉本さんが藤井家代々のご先祖様にご挨拶をされた。尽きないお話の後、最後に吾平津媛さんのお社に改めてお参りし、再訪することが出来大変有難く感じた。

霊界人として今もここに一緒に生きているとわかることが大事だと杉本さんが伝えられた。私自身は、御所という地域が持つ陰と陽、光と影から何か深いものがあらわれてくるという、お話の中で出てきた藤井さんの言葉に納得しながら大倭に帰りついた。

◇

「――敵……？　敵は天皇や」アナキストの向井孝さんはある時そう言ったらしい。全くその通りだという面と、完全に同意は出来ない矛盾を天皇（制）というものに抱えていた10年くらい前のこと、教務本庁で自然と出てきた話が私の記憶に残っている。

霊界には天皇だけがおられる「兜率内院」があり、真の天皇陵には紫雲がかかる。他国では、王権というのは武力や知力、権力といった力を持つ者が君臨し、政権交代することが一般的だが、日本は霊的資格者が統べ治めてきた。スメラミコトの遺制である。長曽根彦以前の歴代の登美のスメラミコトは女性であり、長曽根彦の時に偶々男性だったとも聞いた。くにの成り立ちの黎明期は、父系制が母系社会を駆逐していく過程なのだろうか。長曽根彦は自決、吾平津媛は孤独を強いられ、そこに連なる人々の大きな動きを伴い、私達の悲喜交々の大きな因となっている。

大倭の祭典では最初に「くにのもと」を唄うのが常だが、先頃の8月15日などは立教開宣祭と東光大祭・祖霊祭と祭典が重なったため、これでもかというくらい唄った感じがした。「くにのもと」は神武天皇の心境で、「黎明大倭」は長曽根彦の心境で、聖歌をわかることが大倭の肝となると聞いている。

幾千年の思いと交流しながら和の光に向かっていくことを願い、今回の訪問を快く受け入れてくださった藤井さんと歴代藤井家のご先祖様方に深謝いたします。

吾平津媛の心に応える

あじさい邑　杉本　順一

平成19年5月20日第294回の文化行事で神武天皇社を訪ねた時、「私もここにいる事を知ってほしい」と言ってこられたのが吾平津媛であった。

あれから12年、思いもかけず永仮姉妹の御所の神武天皇社訪問の話をお聞きした。吾平津媛の祀られてある嗛間神社が天皇社の近くにある事を知った。嗛間神社の詳しい話を聞いて心が騒いだ。嗛間神社は藤井家のお屋敷の中にあるらしい。無理を承知で永仮姉妹に藤井家訪問の許可を得ていただくようお願いした。

願いがかない、令和元年7月19日に御所の藤井家をお訪ね出来た。藤井家では奥様から今までに聞いた事のないようなお話しの数々を伺うことが出来た。最後にお庭に祀られている吾平津媛に挨拶に行く。

私が関わる多くの霊界さん達が願うのは霊界の日の聖が放つ「和」の光である。今回もそんなつもりでお社の前に立った。雨の中、傘を持ったまま膝がおれてしまい、小さなお社と私の顔が向かう形になった。

いきなり私の中に狭野の命（後の神武天皇）が飛び込ん（？）できた。懐かしい妻に会ったような感覚に襲われ、不覚にも、そこからはただただ、声をあげて号泣している自分であった。時間の感覚も無くなっていた。こんな体験は初めてだった。

九州から苦労を共にしてきたであろう妻が、時の事情により、その座を退けられたことは吾平津媛にとってどんな思いであったろうか。

法主さんの「現身はよし朽つるとも　永久に結ぶ心のかわるものかは」の味の世界であった。

風ぐるま

私見、「みんな仲良うせい」

大阪府河内長野市
金澤　秀郎

「大倭」の坂田洋美さんとは、川口由一さんの漢方講習会などでご一緒して、深いご縁をいただいています。その坂田さんから、機関紙『おおやまと』が送られてきました。何気なく読ませていただくと、法主矢追日聖さんの言葉に引きつけられました。インターネットで『おおやまと』を検索すると、なんと、２００１年12月号からＰＤＦが掲載されているではないですか。それから毎日、毎日、一号ずつ、楽しんで読ませていただきました。

その中で、私が一番影響を受けたのは「みんな仲良うせい」という言葉でした。人間が生きていく中で「最も素朴で最も難しい課題」だと思います。今回は、この言葉の意味を私なりに考えてみたいと思います。

私は、小さい頃から、自己の内面のことを書いてある書物を好んで読みました。大学も文学部の哲学科に進学しました。亀井勝一郎の著作から親鸞を知り、『歎異抄』に魅了されました。この頃から今までずっと、宗教に、いや、宗教哲学に一番、私はしっくりいくものを感じていました。

そんな私に、「霊性」が発露される機会が訪れます。２０１１年４月13日に家内を乳ガンでなくしました。６年間の闘病生活でつらい抗がん剤治療に愚痴もこぼさず、素晴らしい死に様でした。この時、私は人生で初めて「悲しみ」を知りました。本当に大事な人を失ったときの「悲しみ」。この「悲しみ」は、内にばかり向いていた自分を外の世界に導きました。恥ずかしながら、やっと、他人の苦しみ、悲しさが少しわかるようになりました。この「悲しみ」という感情を実感することによって、法主様のお言葉「みんな仲良うせい」が、どれだけ難しいことか、どれだけ深い内容を蔵しているか、そして生きていく中で、どれだけ重要なことかが理解できるようになったのです。

法主様は、心の中では「嫌いだ」と思っていても、表面的に「仲良うせい」と、おっしゃっておられるのでは決してないと思います。しからば、心の底から「仲良くしたい」と思う心は、どんな心か。自分が最も解放されて、生きることに喜びが満ちあふれ、他人の喜びや悲しみが自分のことのように感じられる心。これは、仏教でいう悟りの心です。

仏教と言えば、「諸行無常」だとか、「諸法無我」だとか、何か否定的なイメージがありますが、大乗経典の後期のお経である『大般涅槃経』では、悟りの世界を「常・楽・我・浄」の世界であると説いています。

世界的な禅者であった鈴木大拙は『神秘主義』という書物の中で、「常・楽・我・浄」を「変化しないもの（常）、幸せを与えてくれるもの（楽）、自律的なるもの（我）、そして、心の穢れから完全に自由な状態（浄）」と、解説しています。

すなわち、悟りの世界は、無常ではなく永遠であり、苦しみでないどころか、楽しく幸せな世界、そして、無我ではなく、大我としての我が自由意志を持って、自由に振る舞うことができる世界であるというのです。

大拙の解説は、私にとって衝撃的であるとともに、「常・楽・我・浄」とは、般若心経でいう「色即是空　空即是色」の「空即是色」に相当するということが理解できました。

でも、私を含めて、ほとんどの人は、悟ることができない。それでは、「仲良うせい」は、到達することのできない課題でしょうか。

テレビをよく見る私は「こころの時代」という番組が大好きです。岐阜県の正眼寺の師家山川宗玄さんが、悟りの世界を次のように表現されていました。「現成とは、現実の今の状態ではなく、我々の意識を超えた世界、神や仏が本来創り出している世界。そこに起きていることは、わずかしかわからない。それはもう、あるべきようにあるわけで、素直に受け入れて、そこに知恵を働かす。ただ、現成を受け入れて、その時、その時に、最善を尽くす」ということだ、と。

この言葉を聞いて、悟りの世界が、我々の彼方にあるのではなく、今、ここに、創造的に働いているということを、改めて確認できました。「常・楽・我・浄」の悟りの世界が、我々の意識では把握できないけれど、現に、在るのだから、ただ、「現成」を信じて、その時、その時、起こってくる出来事に最善を尽くしなさいと言っておられるのだと思います。

最近、友達と会話をしていて、お互い同士が、相手を尊敬し、話の中身が真理を追究するものであれば、真理のさらなる高みに到達できるのではないか、という思いを抱きました。「仲良うせい」とは、一人よりも二人の方がさらなる真理の高みに到達できるということをおっしゃっておられるのではないかと、思いました。「仲良うせい」とは、その意味で、悟りの世界に近づく近道なのかもしれません。

偉そうなことを書きましたが、お許しください。宗教の世界は、「冷暖自知」の世界です。残り少ない我が生が、いつも、今も、神様、仏様に支えられていることにさらに確信が持てるように、毎日毎日を大切に過ごしたいと思っています。ありがとうございました。

あじさい日誌

9月15日　大倭神宮月次祭。

9月23日　大倭大本宮月次祭。この日の法話は昭和41年9月23日月次祭のCDでした。（本紙未掲載）

浅井克明さんの案内でお参りされた奈良市の野村彩華さんが教務本庁で杉本順一さんと歓談。

9月28日　午前10時30分頃、石垣雅設さんの紹介で法主さんのことを知りたいと、東京大田区の宮崎貞行さんが来邑。杉本順一さんが応接しました。

午後1時から教務本庁で『おおやまと』編集会議。発行部数の話題で、残部をただ棚に置くより、有志に多く送ってはどうかというアイデア。宗教的修行は日常の暮らしの中でと法主さんは言われましたし、話のタネなどにして頂くとか、それがまた神ながらの法とか道に気付くきっかけになれば……と。

10月6日　大倭神宮月次祭。

夜、大倭会館で邑倭の会。

大倭安宿苑では

9月28日　「あすかえん祭」開催。沢山のボランティアに支えられ、天候にも恵まれました。富雄南中学校のギター・マンドリン演奏、カラオケ、ビンゴゲーム等々、無事終了に感謝！（菅原園）

9月8日　会議室を映画館のようにセットして、「フラガール」を上映しました。（須加宮寮）

9月23日　大倭墓地へお墓参りしました。（長曽根寮）

9月16日（デイ）　ボランティア2組による敬老会の行事を行い、職員手作りの記念品をお渡ししました。

9月19日（特養）　誕生日会。今月は6名の方々でした。（茂毛路園）

9月12日　合同防災避難訓練が実施されました。（八重垣園）

9月28日　あすかえん祭に多数参加、普段外に出られない方も気分転換になりました。

こだまことだま

青森県弘前市　石田　勝利

8月号の特集「味の世界」を幾度となく読み返しました。霊界と現界との混同した70年で誤解やトラブル、変人扱い。まして美容院という接客業で会話にも気遣いした人生を想い出します。一方、悩み事に応える事も感謝される事も多かったし、楽しいですネ。

令和元年度大倭会文化講演会

中国医学、統合医学と医療の世界を旅して
～中国医学や気功の第一人者からお話を聞く

日　時　令和元年11月17日(日)　午後2時～

場　所　大倭拝殿　入場無料

講　師　鵜沼宏樹（うぬま ひろき）氏

プロフィール:

◇1962年、鳥取生れ。中国北京中医学学院（現・北京中医薬大学）に留学、卒業後も研究室に勤務。日本で鍼灸・指圧師の資格取得後、再び留学し中医学の研鑽を積む。

帰国後、帯津三敬病院で治療にあたり、現在「統合鍼灸治療元気院」院長として活躍中。著書『医療気功』『症状を楽にする簡単気功レシピ』他。

あんない

＊月次祭（大倭神宮）

11月6日(水)　午後2時より大倭神宮にて。

＊月次祭（大倭神宮）

11月15日(金)　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催第610回禊会

11月17日(日)　第3日曜日の変則となり、文化講演会として行われます。詳細は上欄に。

＊月次祭（大倭大本宮）

11月23日(祝)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

表紙写真によせて

福井市　齋藤　正宏

大分県豊後大野市にある原尻（はらじり）の滝です。東日本大震災の復興ボランティアで四年を過ごした岩手を後に、生き方を見直す旅で九州を訪れたときに出会いました。阿蘇の大噴火が生み出した滝も美しいですが、川床が全て溶岩でできていることに驚かされました。

最近は温暖化が問題ですが、過去において地球の寒冷化にともない、長野県から信濃川沿いに新潟県の魚沼地方を経て、長岡へと移り住んだ縄文人たちの足跡を訪ねて、土器を野焼きしたり、野営しながら、生木を削ってスプーンをつくることに今、熱中したりしています。

自然災害が目につく昨今だからでしょうか、自然からいただく暮らしや技が面白く感じられます。

皆さんも、焚き火を囲む時間をもってみませんか？

編集後記

▼5頁「こもれる魂魄の地を訪ねて」の補足。昭和46（1971）年5月23日発行『すさのお』第53号の表紙写真は、法主さん撮影の「神武天皇社神地から本馬丘神南備を望む」であった。写真の正面の丘がそうである。本馬丘は嗔間丘（ほほまがおか）が訛ったものであるという説明もある。思い出せば、この写真の所へ行きたい！ということで実現したのが、平成19（2007）年5月の文化行事なのである。（春）